Musa 博物館学芸員課程年報　第 38 号
pp.1 ～ 5　2024 年 3 月

ボランティア受入れに対する学芸員側の心構え

初宿　成彦 *

要　旨

博物館におけるボランティアの存在は世界的には当然だが、勤務していた博物館では人員削減につながりかねないとして禁句であった。時代が移り変わり、野外行事、標本管理、展示制作など博物館業務全体で順次、ボランティアの受入れが進んだ。その経緯を紹介する。社会教育施設である博物館の場合、ボランティアにはより深く学べる場としてもらうのがよい。その過程でボランティアが楽しく、居心地よく活動してもらえるよう、学芸員側としての必要な心構えや考えたことを述べる。

キーワード

ボランティア　野外行事　標本管理　展示制作　博物館

はじめに

筆者は 1993 年 4 月から 2022 年 3 月までに 29 年間、大阪市立自然史博物館で昆虫担当学芸員として勤務していた。振り返ってみれば、暇と思ったことがないぐらいの激務で、定年まで 7 年を残して早期退職した理由は、身体を壊したこと、職務環境が改善されない現実、そしてこのまま勤務しつづければ、次は命を落とすかもしれないという危機感であった。

この間、実に様々なことを経験した。そのうち、ボランティアとの関わりについて、時系列的な変遷や学芸員側に必要な心構えなどを述べてみたい。

行事でのボランティアの導入

本来ボランティアとは、参加することによって自らの喜びを高める活動のことである。例えば災害のボランティアはたいへんな作業であるが、これに参加する方々は利他的な行動によって自らの喜びにすることを理解している方々である。しかし日本では一般に、労働に相当することを行なっても謝金が出ない場合を指すことが多いように思う。町内の一斉清掃など、いわゆる社会奉仕とボランティアは異なる。サービス残業とももちろん異なる。

博物館におけるボランティアの存在は世界的には当然であるが、1990 年代以前、勤務する博物館内ではボランティアという言葉は禁句であった。大阪市の職員間では当時、労働組合の存在感がたいへん大きく、ボランティアの受入れは「人員削減につながる」というのが理由であった。1996 年に担当した昆虫化石展で、展示を一緒に作る人を募集しようとしたら、「組合で問題にしてやるぞ」と脅しのようなことを言われたことがある（そして断念した）。

しかし情勢は変わり、ボランティアの導入が大阪市役所側から強く求められるようになった。そのため、1998 年から「補助スタッフ」という制度が導入された。このあたりの先導をしたのは、後に館長となった山西良平学芸員であった。

補助スタッフとは野外観察会において、安全な遂行、解説の補助などをする人員である。事前の下見は少人数で行なうため、補助スタッフはその観察会のテーマについて、一般参加者より深く学べる機会となる。また導入当初は交通費も、下見・当日とも大阪市からの予算で支給してもらえた。自らの喜びを高める活動としての「正しい」ボランティアの形であったと思う（しかし館内で批判を述べていた者はいた）。

* しやけ・しげひこ　追手門学院大学・共通教育機構・非常勤講師（生命の科学）／大阪市立自然史博物館・外来研究員

標本管理におけるボランティア

1996年に大阪市住吉区在住の昆虫研究者、林匡夫氏が逝去された。高卒ながらカミキリムシ研究に大きな足跡を残した人物で、大量の標本、特に新種記載に保管が義務付けられる模式標本（タイプ標本）を個人で多数を保持されていた。博物館へ運んだ時点で既に傷んでいるものもあり、また未整理状態で、このままでは研究者らの閲覧には耐えられない状態であった。

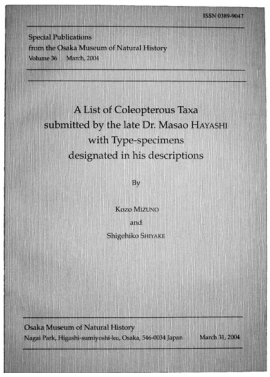
カミキリムシを始め甲虫類に造詣の深い水野弘造氏（京都府宇治市）が、この標本整理に名乗りをあげてこられた。当時はまだ西側の「花と緑と自然の情報センター」（以後、西館）の建つ前で、講演を行う集会室や会議室に昆虫の標本棚が置かれていた。そこへ週１～２日、大阪・長居公園までの長距離を手弁当でおいでくださった。もちろん自発的に言っていただいたことではあるが、私はこれはボランティアではなく賃金が支払われるべき労働であると考え、交通費だけでも工面できる努力をした。しかし館内の学芸員らは自らの研究やイベントで忙しく、標本整理に関心を向ける者は少なかった。交通費が出せない場合があっても、水野さんは嫌な顔をされることなく、引き続き足しげく通ってくださった。林匡夫さんの標本目録は収蔵目録第36集としてまとめることができた（Mizuno & Shiyake, 2004：図１）。

収蔵庫が西館の地下に移った後、水野さんが高橋敞氏（京都府井手町）・安井通宏氏（大阪市阿倍野区）・有本久之氏（大阪市住吉区）・伊藤建夫氏（京都府八幡市）らにも声をかけ、標本整理のボランティアグループの輪が広がっていき、西館地下の特別収蔵庫はいささか、在野甲虫研究者のサロンのような状態になった。氏らの尽力によって、まさしく電話帳のような細かい字の分厚い標本目録４冊（第43・44・46・47集）が刊行された。やはり収蔵品のアウトプットは重要で、ここに掲載されたデータは全国で利用されたようで、また誤同定の連絡もいくつかあった。訂正の困難な紙ではなく、電子データによるアウトプットが必要だと思っていたが、2000年代初期に導入された標本データベースは活用されないまま放置されていて、そのことを気にかける学芸員は（導入にかかわった本人も含め）いなかった。

野外調査のボランティア

野外で調査をして、その成果を特別展でまとめるプロジェクトのシリーズは大和川展（開催年は2006年、以下同じ）が最初であった。開催の３年前に友の会会員らと班を結成し、それぞれの班を単位として調査をし、半年に１回程度、全体の報告会を行なうというものであった。これは博物館全体の野外調査をボランティアと共に行なう、最初の事例であったと思う。

川がテーマということで、私の担当した甲虫班はホタル、河川敷のコガネムシ、川底にいるヒメドロムシ・ヒラタドロムシ、を調査するということにして、定期的に調査会を開き（図２）、班内のニュースレターを頻繁に発行し、班内の結束力を高めるようにした（図３）。プロジェクトは淀川展（2010年）、都市の生物展（2014年）、外来生物展（2021年）でも継続された。展示解説書と展示だけでは成果とはいえないと思い、研究紀要で論文として成果を出すようにした。いくつかはボランティアの主著となっている（初宿ほか2008、安井ほか2008、安井ほか2011、冨永ほか2012、冨永ほか2012、初宿ほか2020、初宿ほか2021）。


ISSN 0389-9047

Special Publications
from the Osaka Museum of Natural History
Volume 36 March, 2004

A List of Coleopterous Taxa
submitted by the late Dr. Masao HAYASHI
with Type-specimens
designated in his descriptions

By

Kozo MIZUNO
and
Shigehiko SHIYAKE

Osaka Museum of Natural History
Nagai Park, Higashi-sumiyoshi-ku, Osaka, 546-0034 Japan March 31, 2004

図１. 大阪市立自然史博物館収蔵目録第36集。2004年３月発行。

図２. 大和川上流部でのヒメドロムシ調査。2005年9月。

図３. 都市生物調査プロジェクトU甲虫班ニュースレター第21号表紙。2014年3月。

展示制作のボランティア

各プロジェクトの班で調査を行ない、そのまま展示のほうも班で制作するという流れは、プロジェクト全体として必然的だった。このころには脅しをかけてきた上記人物も、忘れたかのように黙っていた。

私自身がそれを最初に行なったのは大和川展（2006年）のホタルシアターであると思う。ホタルシアターとは、ホタルのすむ大和川上流の川べりをジオラマにしたもので、展示室内に暗室を設け、黒いカーテンを開けるとホタルが光り、川のせせらぎが聞こえる、というものであった。川べりの植物が必要であったため、班員らと色画用紙などを用いてイネ科植物などをいっしょに作った（図４）。

都市の自然展（2014年）ではヒトスジシマカの模型（図5）、氷河時代展（2016年）では氷河地形模型（図６）、を友の会会員らと制作した。前者は他館から貸出依頼が来たり、後者は今も常設展で展示されたり、するなど、素人の制作ながらも、なかなか悪くない出来栄えであったと思っている。

標本整理まつり

プロジェクトの活動では野外調査とは別に、屋内での勉強会も開いた。大和川・淀川のプロジェクトでは、河川敷に見られるコガネムシ類の見分け方について、この虫に詳しい松本武氏（大阪市淀川区）に来てもらって、実際に同定済標本や絵解き検索図に基づいた勉強会を開いた。この作業を通じて、標本の整理が進むことに気づき、その後、雑昆虫に幅広く詳しい市川顕彦氏、水生昆虫専門家の谷田一三・元館長、双翅類に詳しい大石久志氏を講師とした標本整理まつり（ハサミムシまつり、ゴキブリまつり、トビケラまつり、ハナアブまつり、など）を開催した（図７）。毎回、10 ～ 15人の人が集まってくれて、博物館としては標本の整理が大いに進み、参加者は同定能力が身について、ボランティア活動としては双利的で理想的なものであった。

博物館でもっとも点数の多い甲虫類については、「ビートルズまつり」と称し、ビートルズナンバーを CD でかけながら、雑多に入っている箱をオサムシ・ゲンゴロウ・テントウムシ・カミキリムシ・・・、といった具合に科レベルで整理する作業も行なった（図８）。上記のコガ

図４. ホタルのジオラマ（大和川展ホタルシアター）の制作風景。2006年6月。

図５. ヒトスジシマカの模型製作（都市の自然展）。2014年6月。

図６. 氷河地形模型（氷河時代展）の制作。2015年12月。

図７. はなあぶまつり。2019年2月。

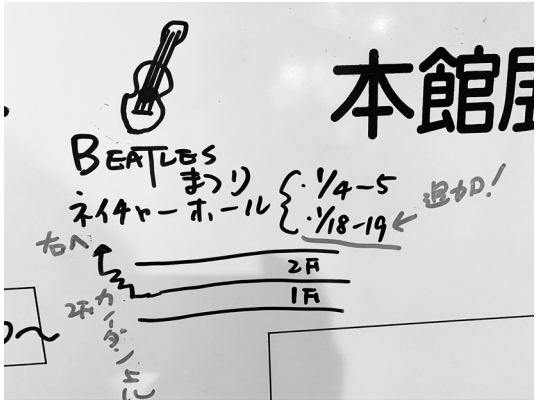


図８. ビートルズまつりの案内表示。2020年1月。

ネムシの勉強会のように、参加者に身につく要素は少ないが、それでもボランティアとの信頼関係が構築できていたためか、毎回、たくさんの方が手伝いに来てくれた。ここで気づいたのは、その日の整理作業の進捗と未整理標本の分量から考えて、私は定年までの期間、他のことをまったくせず、未整理標本の作業をするだけでもまだ終わらない作業量があるということであった。目の前が真っ暗になった。

学芸員の工夫と努力

ボランティアは「募集すれば来る」と思っている人もいるようだが、それは誤りであり、無償で作業に来てもらうための工夫と努力が、学芸員側にも求められる。

まず、ボランティアに自らの喜びとしてもらう工夫が必要である。社会教育施設である博物館の場合は補助スタッフや標本整理まつりのように、学びの場としてもらうのが最もよいだろう。

次にグループ内での調和を保つ努力である。ある時、ボランティア同士で仲違いが始まってしまい、双方から「あいつは気に入らん」という悪口を聞かされた。活動中の雰囲気が悪くなってしまったので、私は双方に「しばらくは来ないでくれ」と伝えた。一方は承諾してくれたが、他方からは激怒の電話がかかってきて罵られ、結局はやめて行った。後者の人物は、ボランティアに来た（本人としては「来てやった」）印象が私の記憶から薄れない間に、他では得られない情報など、自分だけが得をすることを要求してきて、協調性の無さと図々しさに私自身が取り扱いに困っていた（つまりボランティアの精神を理解してなかった）。なので、去って行ったのは本音ではありがたかった。しかし、結果的に人をまとめることができなかったという挫折感は残った。人は様々で、ボランティアにも様々なタイプの方があることを理解して接しないといけないと思った。

またグループ内で情報が偏らないようにしなければならない。一回欠席したら、班内の課題などがわからなくなるようでは、置いてけぼりを食らったような、淋しい気持ちになるものである。上述の班内ニュースレターには、そのような意図があった。

最後にもっとも苦労するのが、特に活動時に居心地がよく、楽しく、次からも来たいと思うような場所にしなければならないことである。上述の音楽CDによるBGMにはそのような意図がある。また暖房の止まった寒いネイチャーホールでの作業ということで、早めに出勤して、暖かいシチューやボルシチを作り、昼食時にふるまったこともある。

最後に

ボランティアを受け入れるにあたり、上に述べた学芸員側の工夫や努力のほか、素養のようなものも必要である。私自身は勤め始めたころは協調性に乏しく、とてもボランティアとうまくやっていけるような性格ではなかったと思う。しかし、退職時にはたくさんのボランティアに囲まれていた。他人を変えさせるのは難しいが、自分自身は変われると思う。

ある時、組織の上層から「作業をしてもらうための予算が付いた」からと「あなたのところに来ているボランティアをアルバイトにまわせ」と言われたことがある。しかし私はそれを断った。ボランティアが労働に変わった瞬間に義務感が発生し、たとえ同類の作業であっても、雑談もできなくなり、楽しくなくなるからである。このように行政や組織の上層には、「ボランティア＝無賃の労働力」という意識がいまだに強く、このようなボランティア側の繊細な気持ちが理解できていない場合が多い。

最初に述べたとおり、若いころ「ボランティアは人員削減につながる」という労働組合の意見に従い、ボランティアの導入を断念した。学芸員の数は1960年代の５人から15人に増え、博物館全体としてはその成果があったといえるのかもしれない。だが、昆虫分野は２人から３人になっただけで、私自身には労働組合に加入しているメリットはほとんどなく、２回にわたって過労が原因で倒れた時も、組合は他人事のようだった。「労働組合で問題にしてやる」と言ってきた上記人物に私は「騙された」とさえ思っている。

組織のいうことに従うのではなく、自らの考えで行動することを大切にすべきだったと思う。しかし、日本型ムラ社会でそれを実行するのは困難であるとも思う。

【文献】（発行年順）

Mizuno, K. and S. Shiyake（2004）A List of Coleopterous Taxa submited by the late Dr. Masao Hayashi with Type-specimens designated in his descriptions. Special Publication from the Osaka Museum of Natural History Vol. 36. 84pp.+22pls.（水野弘造・初宿成彦　2004.　林匡夫博士記載の甲虫類リスト～タイプ標本および大阪市立自然史博物館での収蔵状況について～．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第 36 集，84pp，22　図版）

初宿成彦・大阪市立自然史博物館大和川水系調査グループ（プロジェクト Y）甲虫班（2008）　大和川水系におけるヒメドロムシ相および分布について．大阪市立自然史博物館研究報告（62）：47-64.

安井通宏・初宿成彦・大阪市立自然史博物館大和川水系調査グループ（プロジェクト Y）甲虫班（2008）　大和川水系のミズギワゴミムシ類の種類相と分布状況．大阪市立自然史博物館研究報告（62）：27-45.

初宿成彦（編）（2011）　大阪市立自然史博物館所蔵甲虫類目録（1）－ゲンゴロウ科，ゴミムシダマシ科，ナガクチキムシ類－．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第 43 集．208pp.

安井通宏・初宿成彦・大阪市立自然史博物館淀川水系調査グループ甲虫班（2011）　淀川水系調査流域におけるミズギワゴミムシ相と分布状況．大阪市立自然史博物館研究報告（65）：39-76.

冨永修・初宿成彦・大阪市立自然史博物館淀川水系調査グループ甲虫班（2012）　淀川水系のヒラタドロムシ相および分布．大阪市立自然史博物館研究報告（66）：39-48.

冨永修・初宿成彦・大阪市立自然史博物館淀川水系調査グループ甲虫班（2012）　淀川水系におけるドロムシ科・ヒメドロムシ科甲虫相と分布．大阪市立自然史博物館研究報告（66）：19-38.

初宿成彦（編）（2012）　大阪市立自然史博物館所蔵甲虫類目録（2）－ゴミムシ類，カミキリムシ科 Pidonia 属，ハムシ科－．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第 44 集．372pp.

初宿成彦（編）（2014）　大阪市立自然史博物館所蔵甲虫類目録（3）－シデムシ科，コガネムシ科食糞群，ヨーロッパ東部産オサムシ科，コメツキムシ科（1）－．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第 46 集．200pp.

初宿成彦（編）（2015）　大阪市立自然史博物館所蔵甲虫類目録（4）－ハネカクシ科１・コメツキムシ科２・テントウムシ科－．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第 47 集．145pp.

初宿成彦・安井通宏・市川顕彦・桂孝次郎・河合正人・中谷憲一・山崎一夫・大阪市立自然史博物館「都市の自然」調査グループ甲虫班（2020）大阪市の甲虫相とその変遷．自然史研究４（3）：41-104.

初宿成彦（2021）　大阪市立自然史博物館･外来生物調査プロジェクト（ProjectA）によるムネアカオオクロテントウ･ユーカリハムシ・ヨツモンカメノコハムシの市民調査報告．大阪市立自然史博物館研究報告（75）：53-78.